

小笠原諸島の海鳥は、増えたり、減ったり、 海を越えたり、超えなかったり

講師：川上 和人 森林総合研究所 鳥獣生態研究室長

世界自然遺産地域である小笠原諸島には、これまでに21種の海鳥の繁殖記録があります。その中には、オガサワラヒメミズナギドリやオガサワラミズナギドリ（セグロミズナギドリ）、クロウミツバメなどここでしか繁殖しない固有性の高い種もいます。多くの海鳥がいるのは、小笠原諸島が海洋島だからです。海洋島は深い海洋底をつくる海洋プレート上にあるため、多くの場合は捕食者となる肉食哺乳類が自然分布しません。このため、地上で集団営巣するような海鳥が繁殖地として安全に利用することができます。



海鳥は生態系の中で、海から陸への物質の運搬、島間を結ぶ種子散布、踏圧や巣穴掘りによる新たな環境の創出など、多様な機能を発揮します。それぞれの個体が持つ機能はそれ

ほど大きくないかもしれませんが、彼らは数千から数万、数十万個体を含む集団営巣地を形成することによって、全体としてとても大きな影響を発揮します。このため、海洋島の生態系を考える上で、海鳥の存在は欠かすことができません。しかし、人間は近年の短い歴史の中で海洋島に外来生物を意図的・非意図的に移入してきました。その結果、世界各地の多くの島で海鳥の繁殖集団が消失していきました。

小笠原諸島では1830年から人間が入植しました。人間はネズミやネコ、ノヤギなど様々な外来種を持ち込むと共に、羽毛採集などのための乱獲も行いました。それらの影響で海鳥は減少してしまいました。しかし、最近は自然再生のため外来種の駆除事業が行われ、海鳥の個体数が増加しつつあります。ただし、小笠原の過去の海鳥相はよくわかっていないため、この増加が果たして「回復」なのかどうか分からないという問題に直面しました。このような問題を「ハンプティ・ダンプティ問題」と呼びます。これは小笠原だけでなく世界各地で抱えている課題と言えます。小笠原ではこの問題を解決するため、化石を分析して過去の海鳥相を復元しました。この講演では、小笠原の海鳥相の特徴と保全管理について紹介します。

講師プロフィール

川上 和人（かわかみ・かずと）：森林総合研究所 鳥獣生態研究室長。小笠原を中心に島の鳥の生態系機能や管理などを研究。最近はおガサワラカラヒワの管理や西之島の海鳥相が研究対象。近著「無人島、研究と冒険、半分半分。」（東京書籍）



日時：2023年11月4日（土） 13:30～15:00
会場：我孫子市生涯学習センター アビスタ 1F ホール（千葉県我孫子市若松 26-4）
主催：我孫子市鳥の博物館・（公財）山階鳥類研究所